

授業概要

16世紀半ばから17世紀初頭にかけてイングランドで活躍した劇作家ウィリアム・シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を翻訳と原典を用いて読む。演劇を文学作品として読むということの基本を学びながら、シェイクスピアの作品の中でも最もよく知られた作品と思われる本作品を、台詞を追いつつじっくりと味わっていく。代表的な場面に関しては、随時原典テキストも精読していく。「ことば」の持つ可能性に注目し、かつ想像力を最大限に生かして、テキストに向き合う時間できるように指導する。

秋期の英語圏文学特論（古典）につながる科目である。

授業計画

第1回	オリエンテーション：エリザベス朝とシェイクスピアについて
第2回	第一幕（1）
第3回	第二幕（2）
第4回	第二幕（1）
第5回	第二幕（2）
第6回	第三幕（1）
第7回	第三幕（2）
第8回	第四幕（1）
第9回	第四幕（2）
第10回	第五幕（1）
第11回	第五幕（2）
第12回	全幕をふりかえる
第13回	世界のさまざまな『ロミオとジュリエット』上演について
第14回	世界のさまざまなジャンルの『ロミオとジュリエット』翻案について
第15回	まとめ
第16回	筆記試験

到達目標

「文学作品を読む」という行為を自ら行えるように、読みの訓練を行う。歴史的背景や文化的背景を知ること、「ことば」をコンテキストに即して読むことの重要性を学ぶ。さらに、イメージや修辞法についての基本的な知識を身につける。

履修上の注意

講義科目ではあるが、文学作品の読み方を身につけ、自分で読むという意味では、実習科目である。座って板書を書き写していればよいというものではない。履修するものは速やかに翻訳を購入し、第2回目の授業時までには読み終わっておくこと。遅刻は受講態度においてマイナスとなる。

予習復習

あらかじめ自分で読み、授業で学んだことを活かして再読し、次の場面を読み続ける。これが予習と復習である。また必ず授業前に音読してくること。そのさいに読めない漢字、意味のわからない言葉の意味は調べておくこと。これを行っていないと判断した時には、出席扱いとはしない。

評価方法

予習復習の程度、授業への参加度、随時課すレポートを受講態度として点数化し、筆記による定期試験の結果と合わせて、評価する。

学期末試験70%、授業態度30%。

テキスト

ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』（翻訳でよい、出版社は問わない。ちくま文庫、角川文庫、岩波文庫、光文社文庫が入手しやすい。）各自で購入すること。書店にない場合、発注すると時間がかかるので、他の書店をめぐること。複数の翻訳を購入して読み比べることを強く勧める。原典の必要箇所は随時配布する。